書　評

「文明の主役 ― エネルギーと人間の物語 ―」

著者：森本哲郎　発行：新潮社　定価：1,500円（本体）

評者：**吉田　英生**（京都大学）
E-mail：yoshida@mech.kyoto-u.ac.jp

自宅近くの図書館で，ふと本書を手にとった．その第一ページを開いたとたん，その世界に引き込まれ，ほとんど一気に読みおえた．エネルギーに関して，これほど興味深い書を，私は知らない．21世紀を目前にした2000年12月の発刊であるので，いささか時間が経過しているが，まだご覧になっていないエネルギー・資源学会の会員の方には，ぜひ一読をお勧めしたいと思った．一編集実行委員の自発的な書評という形で紹介させていただく次第である．

ギリシャ神話にでてくるプロメテウスの火を出発点とし，火（力），風（力），水（力），動物，石炭，電気，石油，地熱，太陽，波力，原子力，などの一次・二次エネルギーを，人間がどのように利用し文明を築き上げてきたかが，さまざまな時代と地域を対象として，41章にわたって絵巻物のように展開される．写真も数多く挿入され，読者の思いは自ずと果てしない時空間に広がってゆくにちがいない．エネルギーについて，このような視点から一冊の書にまとめ上げるのは，長年にわたって常人ばなれした時空間を旅してきた森本哲郎氏であるからこそ可能になったのであろう．

特に印象に残ったところから，いくつか引用してみたい．まず，貿易風を利用してローマのネロがインドとの交易で異国的な東洋の物産を夢中で買い求めたことについて，以下のような叙述がある．『そのさまは「ただ，ピリッとした（胡椒の）味覚を満足させるために，何という無駄な労力を費やすのか」とプリニウスを嘆息させる体のものであった．しかし，それが「文明」というものの正体なのではなかろうか．すなわち，人間の欲望が交易を活発化させ，その動機が世界の航路を開拓する，という構図である．現代におけるグローバルな経済システムも，その延長線上にあるのだ.』

また，電灯の恩恵に浴した福沢諭吉が「一身にして二生」を得た，と述懐したことに対し，現代を生きる著者は『私には自分の生涯が「三生」どころか「四生」にさえ思えてくる』という．

あとがきにかえた最終章には，次のような叙述がある．『文明興亡の歴史をふりかえると，文明を衰亡させ，ついに死に至らしめたのは例外なく，エネルギーの浪費であった．戦争は，その最たるものだ．エネルギーは文明を発展させる「起動力」であるとともに，文明を滅亡へと向かわせる「破壊力」でもある．だから，その使い方いかんによって，生体はもとより，文明そのものを破滅へ追いやるのである.』

昨今のエネルギー・環境問題に加え2001年９月11日を経験した我々には，この最終章の言葉がとりわけ重く響く．これはという良書に出会えると精神のエネルギーが与えられ，自分の生涯がふくらむように感じる．本書に出会えた偶然に感謝している．